

山梨県北巨摩郡大泉村

史跡 谷戸城跡Ⅲ

—平成12年度 環境整備事業に伴う発掘調査概報—

2001・3

大泉村教育委員会

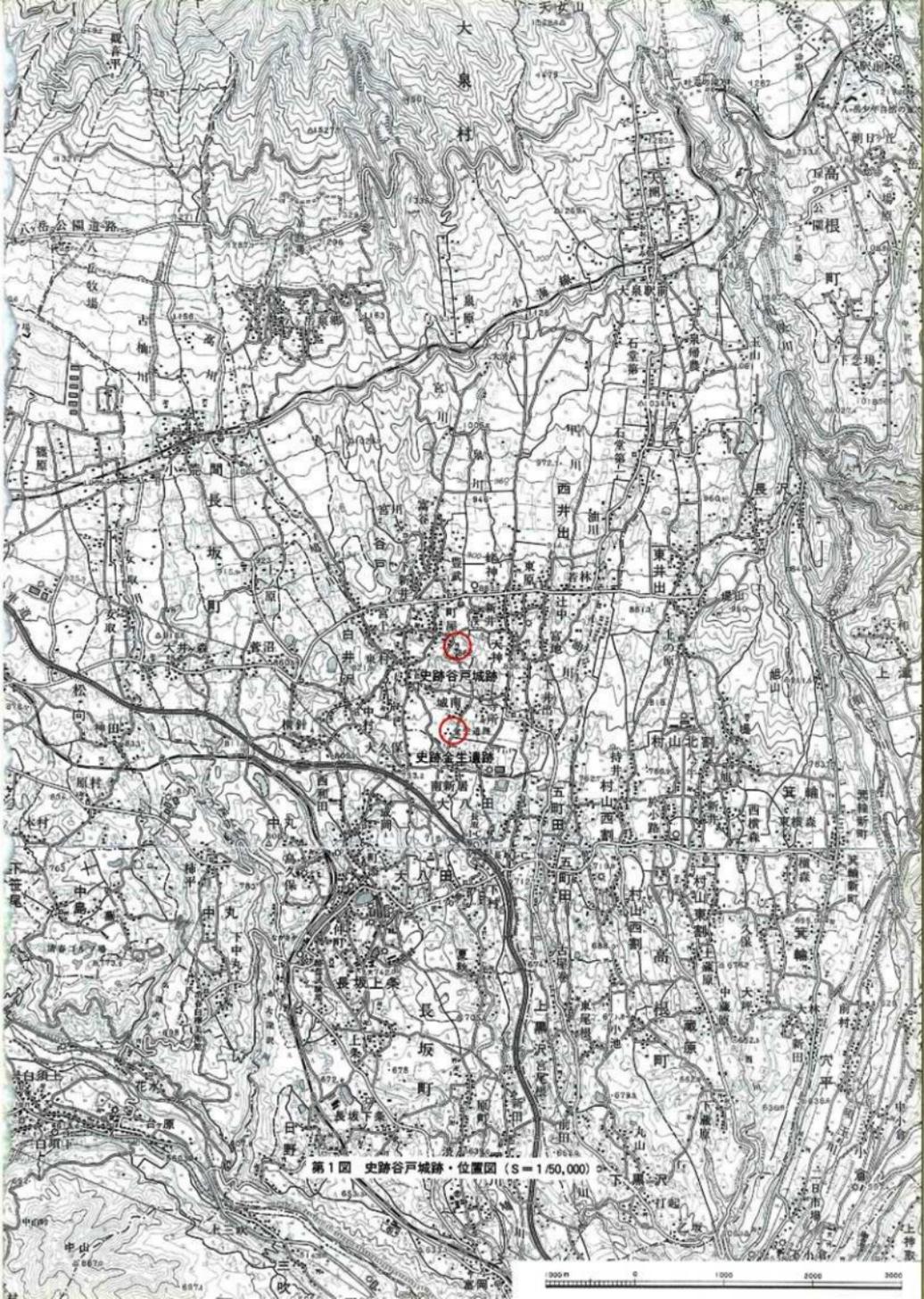
例言

- 1 本書は平成12年度に実施された史跡谷戸城跡の環境整備事業に伴う発掘調査の概報である。
- 2 本調査は文化庁、及び山梨県の補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
- 3 本調査の期間は平成12年7月3日～12月28日までで、調査面積は970㎡を測る。
- 4 本書の執筆、編集は伊藤・渡邊が行った。執筆は第1章を伊藤、第2章を渡邊が行い、その他については文頭に記した。
- 5 発掘調査、及び本書の作成に当たっては次の諸氏、諸機関のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。
秋山 敬、小林健二、十菱駿武、谷口一夫、田畑貞寿、新津 健、萩原三雄、本中 典、八巻與志夫
(五十音順、敬称略)
文化庁 山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター
- 6 本調査の諸記録、出土品は全て大泉村歴史民俗資料館に保管してある。

目次

第1章 平成12年度事業の概要	2
第2章 本年度の成果	4
第3章 出土炭化材の自然科学的分析	10
第4章 平成11年度地中レーダー探査結果について	12
第5章 内耳土器の胎土分析	14
第6章 城内の植生調査	17





第1圖 史跡谷戸城跡・位置圖 (S=1/50,000)

第1章 平成12年度事業の概要

平成12年度も史跡谷戸城跡保存整備事業に伴い、史跡内の発掘調査以外に平成11年度から継続して史跡内の植生調査、出土炭化物の自然化学分析を実施している。また、埋蔵文化財緊急発掘調査事業費枠での史跡周辺の発掘調査を実施すると共に、地中レーダー探査を実施している。また、単独事業で平成11年度から継続して整備基本計画の策定を実施した他、史跡内に残された忠魂堂、忠魂碑の移転、共有名義の石祠の移転を実施している。これら以外に普及活動として史跡内の発掘調査現地説明会を開催し、村内外からの多くの参加を得た。ここでは単独事業で実施したものについて触れていく。

忠魂堂、忠魂碑の移転、及び石祠の移転（写真1～4）

忠魂堂は昭和10年代、忠魂碑は昭和49年に共に谷戸城の二の郭の北側に整備され、久しく村民に奉られてきた。日露戦争以後従軍して亡くなられた英霊を祀った忠魂堂、これらの人々の芳名を銘んだ忠魂碑の移転が谷戸城の史跡指定の同意を得る段階からの懸案事項であったのは平成11年度に移転された八幡神社と同様であった。

さて、これらの所在する土地は旧村を母体とする谷戸組の共有名義の土地で、既にこの一連の事業で公有地化されている。しかし、この地上物件はかつて村で整備された経過があり、その段階では移転の可否について判断が留保されていた。しかし、整備目的の発掘調査が進み、環境整備工事着工を目前に控え、移転を前提に検討が進められることとなった。現在、忠魂堂の例祭は社会福祉法人大泉村社会福祉協議会が事務局となり、遺族会が主体となって運営されているが、法人格を持たない遺族会と高額に上る契約行為を締結することは不適切と判断されたことから（社）大泉村社会福祉協議会と移転補償契約を締結することとして事業が進められることとなった。

平成12年6月に遺族会役員、軍恩連役員と合同の打ち合わせ会を持ち、各地区の総意の取りまとめを依頼し、7月には総意として移転に賛意を得た。これを受け、設計業者を選定し、その内容について協議が進められた。その移転、新築案を遺族会、軍恩連役員に承認していただいた上で11月2日付け大泉村と（社）大泉村社会福祉協議会との間で移転補償契約を締結し、（社）大泉村社会福祉協議会は11月6日付けで工事を発注し、平成13年3月20日に移転工事が完成、3月27日に竣工式を迎えた。

また、史跡内に残された石祠は町屋地区名義のもの、城南地区名義のものがあり、12年12月4日、両者の関係者と合同で移転についての打ち合わせを実施し、石祠移転の実費分と祭料料について補償することで了承された。その後、金額的な詰めを進めた上、平成13年3月23日付で両地区と移転補償契約書が締結され、3月末日現在、石祠の移転が終了している。

普及活動（写真5・6）

平成12年度も普及活動として『公報おおいずみ』紙上で「甦る谷戸城跡」と題した連載を持ち、城郭用語の解説、山梨県内の国指定史跡の中世城館について解説したほか、発掘調査現場の現地説明会を開催した。

発掘調査現場の現地説明会は平成12年12月3日（日）に開催し、村内在住者を中心に凡そ150人が参加し、村民の史跡谷戸城跡の整備に寄せる関心の高さが窺えた。



写真1 忠魂堂及び忠魂碑



写真2 忠魂堂移転後



写真3 町屋地区石祠



写真4 城南地区石祠



写真5 現地説明会



写真6 現地説明会

第2章 本年度の成果

本年度は一の郭、二の郭、帯郭、四の郭を調査対象とし、合計64のトレンチを設定した。調査面積は970㎡である。遺構番号については、昨年度からの継続とした（第2図）。

一の郭（写真7）

二の郭・三の郭に囲まれた郭で、城の主郭に当たり、現況で虎口位置の分かる唯一の郭である。調査に先立つ文化庁との協議の中で、主郭であることから面積の半分は未調査部分として残すのが望ましいとの指導を受け、市松模様状に16のトレンチを設定して調査を行った。

調査の結果、土坑6（16～21号土坑）、ピット23、平成9年度調査で出土した礫石状石列を確認した。郭内の現況は平坦であるが、ローム面まで掘り下げると北東半分と南西半分で高低差が現れた。北東側は表土直下がローム面であったのに対し、南西側はローム面まで50～60cmの深さがあり、i-7-2において緩やかな傾斜面が確認されたことから低い翻状に2つの平坦面となっていることが考えられる。周りを囲む土塁の現況は、東側（二の郭側）が高く、北～西～南が低い。北側は後世に破壊されたと考えられるが、i-7-4の調査ではローム面上に南側土塁の基底部が確認されたことから、土塁築造時の郭内の地表面は今回確認した

ローム面であり、それは同時に城として機能していた当時の姿と考えられる。現地表面からでは低く感じる土塁もローム面に立つと遮蔽物としての機能を十分果たすものであることから、土塁の高さの違いはそのまま郭内の旧地表面の高低差を反映している可能性がある。そして、郭中央寄りのi-6-2・4からは表土下20～30cmの深さで寛永造瓦が16枚出土している。これらを含む層の上層は整地層と考えられるので、明治初頭に八幡神社を建立する際に整地されたものと考えられる。



写真7 一の郭（南から）

●八幡神社跡（j-4-4・i-5-2・j-5-4 写真8・9）

3つのトレンチで土坑3（16～18号土坑）、ピット21を確認した。神社の建物跡には土台とする盛土を行っていたが、その中からも寛永通瓦が15枚出土した。3基の土坑はいずれもj-4-4で確認された。16号土坑は長軸150cm以上、短軸100cm以上のトレンチ外に延びる土坑で、確認面からの深さは15cmを測る。覆土中よりかわらけ等の破片が少量出土している。17号土坑は100×90cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは最深で60cmを測る。覆土中からは内耳土器、かわらけの破片が出土しており、特に内耳土器が多い。これらの内耳土器は二の郭j-2-4の表土直下から出土した内耳土器と接合している。ピットは3つのトレンチでそれぞれ確認したが、特にj-5-4に集中している。どれもが直径30cm以内で、覆土中から炭化材や加血の破片が出土したものがあつたが、建物跡を想定できるような配列は見られず、直線的に並ぶものが多い。



写真8 j-4-4 (西から)



写真9 j-5-4 (南から)

●21号土坑 (写真10)

j-6-2において確認したが、トレンチ外に延びる。平成9年度に調査した5号土坑(出土炭化材の年代測定からは西暦1320±50年の値が出ている、かわらけが出土)に近く、覆土も焼土・炭化材が混ざるなど5号土坑のものに近似しているが遺物の出土はなかった。

●礫集中出土地点 (写真11)

h-6-2、一の郭西側土壁上の表土直下から出土した。24点の石が出土したがトレンチ外にも広がると思われる。その中で遺物といえるのは敲打石、茶白下白、石白上白の計4点のほか、用途は不明だが削ったような痕跡の残る礫2点であった。



写真10 21号土坑(右奥、中央が5号土坑、東から)



写真11 礫出土状況

二の郭 (写真12)

一の郭の東に接続している郭で、一昨年は平坦な郭北半分の調査により建物跡や空堀を確認している。一方、郭の南半分は北から南へ緩やかに傾斜し、空堀を掘って土壁となるが、この土壁の頂部は郭北半とほぼ同じ高さとなっている。北～東の土壁が非常に高く築かれているのに対し、南の土壁は低いという特徴は一の郭と共通している。

2度目の調査となる今回は、郭南半と地中レーダー探査で位置の推定された土構部分の調査を行うため、17のトレンチを設定した。調査の結果、土坑、竪穴状遺構2、空堀、土構を確認した。郭南半も北半と同じく広範囲に攪乱を受けており、出土した遺物は元位置を留めていないが、c-6-2では大きいかわらけ片、d-7-1では内耳土器、茶白の破片が出土しており、中世の遺物が集中する部分も見られる。

●竪穴状遺構 (写真13)

郭南東隅のe-7-2において2基確認した。北に位置する1号竪穴状遺構は不整形の竪穴の西辺に半円

形の掘り込みが接続する。竪穴は南北130cm、東西100cm、半円形の掘り込みは南北75cm、東西50cmを測り、確認面からの深さは前者が30cm、後者が20cmと両者には階段状に段差がある。南の2号竪穴状遺構はトレンチ外に延びるため不明な点が多い。1号に比べて大きい、同じような平面形と考えられ、半円形の掘り込みは東辺に接続している。確認面からの深さは半円が25cm、竪穴が50~60cmで南が若干深くなっている。1号、2号ともに階段状に段差をつける点では共通するが、半円形の掘り込みを接続する方向は異なる。



写真12 c-6-2 遺物出土状況



写真13 1号竪穴状遺構 (東から)

●土橋と空堀 (写真14)

j-2-3・4において確認した。二の郭北側に位置し、これまでの地中レーダー探査によって土橋状の構造物のあることが指摘されていた部分である。土壘内側の空堀の一部を掘り残したもので、上端幅230cm、土橋上と空堀底部との比高差は110cmを測り、両側を空堀に挟まれている。その空堀は上端幅350cm、底部幅120cmを測るが、これと重複して幅6mの浅い掘り込みが認められる。このため、土橋上面は二の郭の面より50~60cm低い。空堀の断面には浅い掘り込みの底部に当たる位置に地栗層と思われる硬い砂質土の層が見られたことから、当初は深い空堀→浅い空堀という順序で堀を掘り直し、地栗層によって堀底の形を整えたと判断した。しかし、この地栗層が空堀の南半分にしが認められないこと、これまでの調査では空堀の重複という事例はなかったことから、通路となる土橋を隠し、防御を固めるために一段低くしたのではないかと考えられる。



写真14 j-2-3 土橋と空堀 (南から)

■帯郭 (写真15)

二の郭の外側を北→東に取り巻く細長い郭で、外縁の低い土壘により区画されている。北の四の郭と東の五の郭を結ぶ通路の役割も兼ねていたと考えられる。これまでに、北側では二の郭土壘に沿った空堀、東側では同じく土壘に沿った浅い溝状の遺構と内耳土器が出土した土坑を確認している。

今回は北側に14のトレンチを設定して調査を行い、空堀2本と土壘下の掘り込みを確認したほか、帯郭外縁の土壘の掘削も行った。

●空堀 (写真16・17)

調査前は昨年度に調査した空堀も含めて、二の郭土壘の外側は1本の空堀が巡っているものと予想していたが、今回の調査により2本存在すること、その間は約25mの間隔があることが判明した。

東の空堀はc-1-3で止まっていることが確認され、これより東側に延びる。帯郭と二の郭を隔てる横堀



写真15 帯郭(東から)

である。西壁は 50° の勾配で表土下150cmの深さまで掘り込まれており、これが上端幅430cm、底幅190cm以上の断面逆台形の空堀となることは昨年c-1-3東半の調査で確認されている。表土下20cmより下層に厚さ40cmのローム質土の地層層も見られ、二の郭内側の空堀とも共通する。

西の空堀はa-1-1においてその東端を確認し、これより西側に延びる。こちらも帯郭と二の郭を隔てる堀ではあるが、その配置や等高線に直交して掘られている点からは空堀の要素も合わせもつと考えられる。上端幅400cm以上、底幅300cm以上、深さは確認面から最深で90cm、勾配は北法面で 40° 、東法面で 60° を測る箱堀である。最深部は底壁北端にあり、南(二の郭側)に向かって非常に緩い傾斜で上がっていく。上幅と底幅の差が小さく、より箱堀に近い形であり、そのためか浅い印象を受ける。



写真16 c-1-3(北から)



写真17 a-1-1(東から)

●土壘下の掘り込み(写真15・18)

a-1-2・b-1-1・4とb-1-3・c-1-4の範囲でそれぞれ確認した。前者は確認面からの深さが最深で20cm程度で全体的に浅く、西側で消滅した。南北4m以上、東西5m以上で土壘とは若干重複する程度である。後者は土壘際とほぼ重なるような位置から掘られ、南へ続く。確認面からの深さは最深で40cmとしっかりしたもので、底は平らである。昨年報告した



写真18 c-1-4西壁

c-1-3の空堀の南側肩に沿った土手状の掘り残しは、この遺構の続きである。当初は土壘基底部の土留めのためとも考えたが、土層断面の観察からはまず掘り込みの北壁に沿って土の堆積があり、その層を土壘基底部の土が南側から覆う様子が観察された。結果的には土留めの機能を果たしていたとは考えられるが、始めからその目的のために掘られたものかは不明である。

●帯郭外縁の土壘(写真19・20)

土壘の戦ち割り調査をb-10-1、c-10-1・4、c-10-3の3地点で行った。大まかな特徴はb-10-1、c-10-1・4とc-10-3で分かれ、前者は全体的に粒の細かい土であるのに対し、後者はローム土をそのまま使うなど使用する土に違いがある。非常に堅い叩き締められたような層は一部にしか認められなかった。



写真19 b-10-1 土壘断面



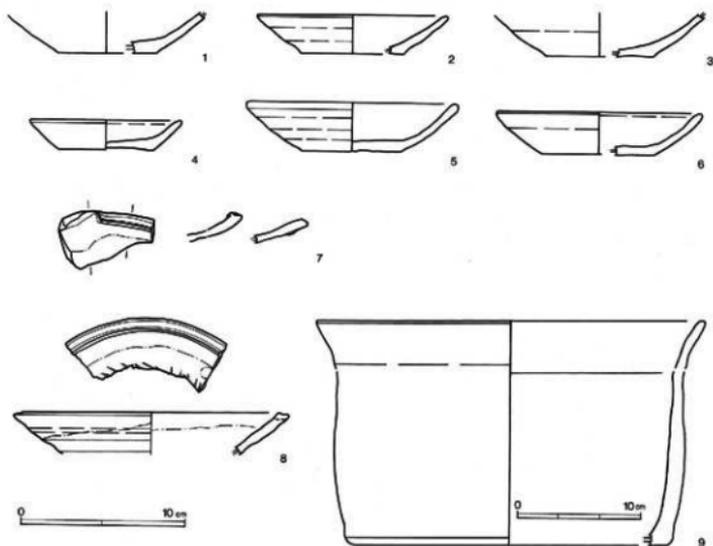
写真20 c-10-3 土壘断面

四の郭

中世の遺構・遺物は確認されなかった。

出土遺物 (第3図)

1は16号土坑、2はj-5-4 (一の郭)、3はj-2-3、4はj-2-4、5はc-6-2、6はe-6-4 (二の郭) 出土のかわらけ。7はj-4-4 (一の郭)、8はj-2-3・a-1-1 (二の郭・帯郭) 出土の卸皿。9は17号土坑・j-2-4 (一の郭・二の郭) 出土の内耳土器。



第3図 出土遺物 (1~8 S=1/3, 9 S=1/4)

第3章 出土炭化材の自然科学的分析

「史跡谷戸城跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定(抜粋)」

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、出土した炭化材26点(試料番号1~26)である。このうち、試料番号12, 16~19, 24~26の8点は、試料の保存状態が悪かったため、分析試料から除外した。残った試料のうち、放射性炭素年代測定は、試料番号1~7, 9~11, 13~15, 20, 22の15点、樹種同定は試料番号1, 2, 4, 6, 8, 9, 11~21, 23~26の21点についてそれぞれ実施する。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、(株)地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社(BETA ANALYTIC INC.)が行った。

(2) 樹種同定

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、

実体顕微鏡及び定査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

第1表 放射性炭素年代測定結果

番号	グリッド	採取位置	補正年代	西暦
1	g-6-2	ピット覆土中	410±40	1540±40
2	g-5-2	12号土坑3層	500±40	1450±40
3	c-5-4	煙土中	240±40	1710±40
4	j-6-2	炭化物集中部分	410±40	1540±40
5	砂場跡	柱穴内	35600±380	
6	砂場跡	サブレンチ西側ピット	3320±40	
7	c-1-3	地層最下部分	570±40	1380±40
9	c-1-3	地層層下の黒色土中	3530±40	
10	c-6-1	地山直上	modern	
11	c-6-2	地山直上	modern	
13	c-6-1	黒色土中	4420±40	
14	c-6-4	黒色土中	7740±40	
15	c-7-4	黒色土中	4060±40	
20	h-6-4	溝状遺構内	540±40	1410±40
22	c-1-2	地層層中	3640±40	

- 1) 年代は、1950年を基点とした年数
- 2) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

第2表 樹種同定結果

番号	グリッド	採取位置	形状	樹種
1	g-6-2	ピット覆土中	小片	モミ属
2	g-5-2	12号土坑3層	小片	ケンボナシ属
4	j-6-2	炭化物集中部分	小片	ヒノキ属
			丸材	ハンノキ属ヤシャブシ亜属
6	砂場跡	サブレンチ西側ピット	小片	サクラ属
			小片	クリ
8	c-1-3	地層最下部分	小片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
9	c-1-3	地層層下の黒色土中	小片	ケンボナシ属
11	c-6-2	地山直上	小片	マツ属複雑管束亜属
12	c-5-4	土塁基部か	小片	クリ
13	c-6-1	黒色土中	小片	クリ
14	c-6-4	黒色土中	小片	広葉樹(節)
15	c-7-4	黒色土中	小片	クリ
16	d-10-1	5層	小片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
17	g-5-2	12号土坑	小片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
18	h-7-1	溝状遺構の砂質土内	小片	クリ
19	d-8-3	土坑13層	小片	クリ
20	h-6-4	溝状遺構内	小片	クリ
21	砂場跡	柱穴内	小片	クリ
23	c-1-2	地層層中	小片	不明
24	g-5-2	12号土坑2層	小片	ハンノキ属ヤシャブシ亜属
25	j-6-2	柱穴プラン上	小片	クリ

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果を第1表に示す。試料番号3, 10, 11は、測定値の誤差範囲が1950年よりも新しい年代まで含んだため、modernとした。ただし、試料番号3については、同位体効果の補正を行った結果、240±40BPの年代値を得ることができた。その他の試料は、補正年代で410~570BP、3320~4420BP、7740BP、35600BPに大きく分けられる。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第2表に示す。試料番号4には3種類が認められた。

試料番号14は、道管を有することから広葉樹材であるが、節の部分であり、種類の同定には至らなかった。また、試料番号23は、保存状態が悪いために木材組織の観察ができず、不明とした。その他の炭化材は、針葉樹3種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ属）、広葉樹5種類（ハンノキ属ヤシヤブシ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属・ケンボナシ属）に同定された。

4. 考察

(1) 年代について

谷戸城は、平安時代末期～戦国時代まで継続していたと考えられている。加速器質量分析法による放射性炭素年代測定の結果では、補正年代で240～3560BPの値が得られた。これらの年代値は、240～570BP、3320～4420BP、7740BP、35600BPに大別できる。これらのうち、谷戸城の存続期間に該当するのは、試料番号1, 2, 4, 7, 20の5点で、補正年代値で410～570BPの値を示す。これらの年代値は、前回の測定結果とも一致しており、谷戸城で利用された木材が炭化・残存したのと考えられる。一方、3320～4420BP、7740BP、35600BPの年代値を示した試料は、いずれも谷戸城が構築されるよりも遥かに古い年代を示している。このうち、3320～4420BPは、中部地方や関東地方で行われた年代測定で、縄文時代中期の年代(1)に一致する。また、7740BPは縄文時代早期に一致する。前回の調査では、集石から出土した炭化材で5210BPの年代値が得られている。これらの炭化材は、谷戸城が構築される以前にも様々な時代の遺構・遺物が埋積しており、炭化材が谷戸城の造営の際に掘り出されて再堆積したり、東村が指摘するように、出土した古材を再利用したことが推定される(2)。また、試料番号3は、谷戸城の存続期間以後の年代を示している。この結果から、谷戸城廃絶後の炭化物も存在することが指摘できる。

(2) 用材選択について

炭化材には、合計8種類が認められた。これらの炭化材は、年代測定の結果から、旧石器時代から近世に至る各時代のものが混在していることが推定される。年代測定結果をもとにした各時期別の種類構成を第3表に示す。谷戸城の存続期間に該当する、410～570BPでは、針葉樹2種類、広葉樹5種類が認められ、様々な種類が利用されていた様子がうかがえる。

第3表 時期別種類構成

	複維管束亜属	モミ属	ヒノキ属	ヤシヤブシ亜属	コナラ属	クナラ属	サククラ属	ケンボナシ属	広葉樹	不明	合計
modern	1										1
410～570BP		1	1	1	1	1	1	1			7
3320～4420BP						3		1		1	5
7740BP									1		1
35600BP						1					1
時期不明			1	1	2	4					8
合計	1	1	2	2	3	9	1	2	1	1	23

時期不明の試料には、針葉樹1種類、広葉樹3種類が認められた。このうち、ヒノキ属、ヤシヤブシ亜属、コナラ節は、410～570BPの時期の試料にも認められていることから、谷戸城で利用された木材に由来する可能性がある。一方、クリについては、出土遺構などから、谷戸城で利用された木材の可能性はある。しかし、3320～4420BPの試料にも認められることから、古い時代の木材が混入している可能性もある。

註

- (1) キーリC. T.・武藤康弘 1982 「縄文時代の年代」『縄文文化の研究1』 雄山閣
 (2) 東村武信 1992 「改訂 考古学と物理科学」 学生社

第4章 平成11年度地中レーダー探査結果について

「平成11年度谷戸城周辺遺跡調査地中レーダー調査委託報告」

テラ・インフォメーション・エンジニアリング

1. 全体状況（第4図）

東側道路に沿って礫性地盤（青色部分）⁽¹⁾が見られる。礫の状況は比較的大きく、一見自然堆積層ではない。この地盤上に道路があり、畠地側には水路のようなもの（黒色部分）が南北に見られる。1, 2, 3の畠地では礫を利用した構造となっており、南では溝の状態となる。

北側の山裾には、ほぼ中央部から張り出した地盤（紫色部分—地山）があり、その大半に土構築（○中に×、地下式土構築）と見られる巨大空洞データが集中する。ただし、この地盤は上下二段になっていて、大型空洞は北の上段に存在し、南の下段には、比較的小型の空洞状データ（×印）が見られる。そして、この上段部分を取り巻くように溝状範囲（水色部分）が見られるが、全体に決定的ではなく、一部は沢地跡の様にも見られる。

また、傾斜面表現が断続的に表れる（郷状の赤線）が、その相互関係はほとんど分析出来ない。埋蔵地形に関係するもの、どのように関係するが不明のものがある。全体的にどのデータも地籍境界に関連している。

2. 1から3の状況

礫性地盤は畠の奥まで存在するが、その一部は遺構状地盤（黄緑色部分）のようにも見られる。実際に図上記入したとき、何らかの繋がりのある遺構構造的な範囲となる。

3. 6, 13, 12, 16の状況

地盤を締め固めたような範囲（構造地盤—橙色部分、人工的に形成された地盤）が見られる。6は安定した地盤で、小規模な土坑も見られるが、データからは住居跡などの可能性もあり、この丘陵としての中心部分でもあり注目される。

4. 14, 15, 16, 17の状況

14, 16から北側に土構築が見られるが、碇線の範囲でのマークなので実際にはさらに多い。深さの関係も含めて見るとその存在状況は異様であり、時代の異なるもの重複とも推察される。

5. 16, 17の状況

堀ではないかと見られるデータ状況（水色部分）があり、16~10を経て東の畠に延びていると見られる。17~7の堀状範囲は4の土構築中地盤で止まるが、4と1の境界付近には傾斜地形が二段に見られ、1では礫層状データ、道路では溝データがあることから基本的には城と南麓を遮断する堀と考察される。

6. 遺構について

全体には盛土地盤のように見られるが、掘り返されている部分もあり、土層関係から縄文遺構は深い部分以外には無いと見られる。先に第二段層（南の下段）が存在すると見られる状況を示したが、これが縄文層の可能性もある。それ以後の遺構も攪乱、切り合いが多いと推測される。

7. 小宮山氏宅前

昨年度の資料も含め検討した。堀に囲まれた範囲では深さ2mくらいの窪地を正確に埋め戻したが、版築並に埋め戻した状況である。小宮山宅の北側道路では土壘と見られる状況があり、各本宅がその上に建っているのが興味を持たれる。

(1) ()内は編集者が加えた。以下同じ。



第4図 地中レーダー探査による遺構等配置図 (S=1/2000)

第5章 内耳土器の胎土分析

「谷戸城跡出土内耳土器の胎土分析(抜粋)」

帝京大学山梨文化財研究所 河西 学

はじめに

山梨の内耳土器については、森原(1993)や服部(1997a, 1997b, 1998)などの報告がある。山梨の内耳土器は、特に北巨摩郡地域の分布が濃密で、器形の特徴は信濃地域と共通するとされる。須玉町塩川遺跡出土内耳土器は、安山岩・デイサイト・花崗岩類などで特徴づけられる多様な岩石鉱物組成を示すことから、在地的(1)な複数の産地の可能性が推定されている(河西, 1992)。今回、本遺跡から出土した内耳土器を産地推定を目的として胎土分析する機会を得たので、以下に報告する。

第4表 分析試料一覧

試料番号	時期	器種	注記
No. 1	中世	内耳土器	e-5-3
No. 2	中世	内耳土器	二の郭一括
No. 3	中世	内耳土器	c-4-2
No. 4	中世	内耳土器	e-5-2
No. 5	中世	内耳土器	e-5-3
No. 6	中世	内耳土器	c-5-4攪乱
No. 7	中世	内耳土器	c-5-4, p-6
No. 8	中世	内耳土器	c-8-4, p-4
No. 9	中世	内耳土器	g-5-2
No. 10	中世	内耳土器	g-5-2, 土器集中部一括

試料・分析方法

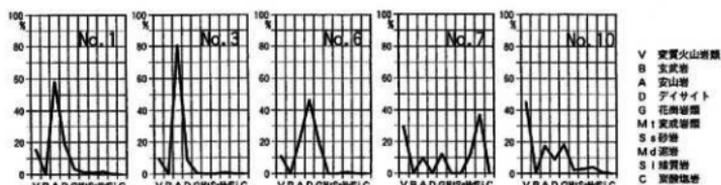
分析試料を第4表に示す。分析方法は、河西(1990)と同様である。

胎土組成における特徴

岩石組成折れ線グラフを第5図に示す。この折れ線グラフは、変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト(2)・花崗岩類・変成岩類・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。折れ線グラフの第1・2ピークの組み合わせによって土器を分類した結果を第5表に示す。

クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出し、本遺跡試料と甲府盆地・八ヶ岳周辺河川砂・大泉村大和田第3遺跡・大和田遺跡・方城第1遺跡、須玉町塩川遺跡、一宮町西田町遺跡などの結果と比較した(河西, 1989, 1990, 1992, 1997, 河西ほか, 1989)。便宜的に1~11の番号をクラスターに付した。以下に試料ごとの胎土の特徴について述べる。

No.1, 2, 3, 4, 5, 8, 9は、粒子構成において含砂率が34.4~47.9%と高率であり、粒子サイズは粗粒~中粒砂が多い。岩石鉱物組成は安山岩>デイサイトで特徴づけられ、重鉱物組成は単斜輝石・斜方輝石が主



第5図 岩石組成折れ線グラフ

第5表 岩石組成による分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
V-g群	変質火山岩類の第1ピーク	花崗岩類の第2ピーク	10
A群	安山岩の第1ピーク	顕著な第1ピーク	3
A-d群		デイサイトの第2ピーク	1,2,4,5,8,9
D-a群	デイサイトの第1ピーク	安山岩の第2ピーク	6
S I-d群	珪質岩の第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	7

体を占める。A-d群に分類され、八ヶ岳南麓地域の河川や須玉川などの河川砂、大和田遺跡曾利式土器、あるいは塩川遺跡No5内耳土器（鍋）などとともにクラスター7に属する。No3は、八ヶ岳南麓において在地的土器であると推定される。他のNo1, 2, 4, 5, 8, 9は、遺跡周辺の河川砂組成と比較してデイサイトがやや多い傾向があり、安山岩を主体としデイサイトを伴う地域に産地が推定される。塩川遺跡No5などと同様に、デイサイト質黒富士火山噴出物の分布する塩川流域・荒川流域が産地候補の一つとしてあげられる。

No6は、粒子構成における含砂率が17.4%と低い。岩石鉱物組成は斜長石・石英・デイサイトが多い特徴を示す。重鉱物組成は角閃石が最も多い。D-a群に分類され、荒川流域河川砂や塩川遺跡No1S字礫などとともにクラスター5に属する。荒川流域・塩川流域などが産地候補の一つとして考えられる。

No7は、粒子は細粒で、粒子構成における含砂率がもっとも低い(7.6%)。岩石鉱物組成は、斜長石・石英・珪質岩などが多い。重鉱物組成は、不透明鉱物が卓越し、単斜輝石・斜方輝石をわずかに伴う。S I-d群に分類され、単独でクラスター11に属する。甲府盆地～八ヶ岳周辺地域において珪質岩が多い河川砂はあまりみられないことから、本試料は明らかに搬入土器と考えられる。松本盆地周辺・関東山地・足尾山地などにはチャートを主体とする珪質岩が分布している。No7は、細粒で含砂率が低く、岩石の割合が少なく、多様な岩石が混在した組成を示しているなどの特徴から、岩石の露出する山地・丘陵地域から離れた平野・盆地の中央部の細粒堆積物などを原料として用いている可能性が推定される。産地については類例を待って再検討したい。

No10は含砂率が39.7%と高率で、粗粒～極粗粒砂サイズの粒子からなる。岩石鉱物組成は変質火山岩類が多く、重鉱物組成は単斜輝石が多い。V-g群に分類され、甲府盆地西部・南部の緑色変質した新第三系分布地域の河川砂とともにクラスター2に属する。No10に含まれる変質火山岩類は緑色変質したものがほとんど含まれないことから、甲府盆地西部・南部などのグリーンタフ地域に産地が推定される可能性は低い。おそらく第四系に属する火山岩類が変質や風化作用で生成した堆積物が分布している地域と関連性があるものと推定される。またNo1, 2, 3, 4, 5, 8, 9などと同様の地域に産地が推定される可能性もある。

考 察

土器の生産・消費システムは、各時期ごとに一律ではないと考えられる(河西, 1999)。すでに考古学的事実から山梨の内耳土器が、信濃地域の内耳土器の器形と類似性が高いことから、両者の関わりが強いことが指摘されている(森原, 1993)。

野村(1990)は、松本盆地を中心に諏訪盆地・佐久盆地の中世土器(主に内耳土器)の胎土分析を行っている。分析の結果、内耳土器は最初集落での自給ではなく時代の降下とともに集落周辺で作られた可能性があり、松本盆地では奈良井川以東地域で主に作られ、各盆地内で作られた土器は、それぞれの盆地内で消費されたことなどが推定されている。八ヶ岳南麓地域に近い諏訪盆地内茅野市御社宮司遺跡の内耳土器は、パーサイト組織を示すカリ長石の存在と単斜輝石・斜方輝石で特徴づけられ、また「安山岩・尖砕岩」に属

する粒子が多い傾向が示された。検鏡の方法が異なるので単純には比較できないものの、谷戸城跡の土器の№1, 2, 4, 5, 9, 10などは、御社宮司遺跡内耳土器のこれらの特徴と共通性が認められるが、御社宮司遺跡内耳土器では石英が長石と同量程度普通に含まれている点で異なる。

塩川遺跡出土の内耳土器は、地元の地質と類似していることから多くが在地的土器である可能性が示されている。塩川遺跡の内耳土器は、花崗岩類を主体とする№11を除くと、安山岩・デイサイトを主体とする胎土組成を示し、岩石鉱物組成・重鉱物組成において若干の相違はあるものの、谷戸城跡出土内耳土器と類似性が高いといえる。

谷戸城跡内耳土器の組成から複数の産地の存在が推定されるものの、安山岩・デイサイト分布地域に産地が集中している傾向が認められる。谷戸城跡内耳土器は、地元ハケ岳南麓に産地が推定されたものが№3の1個体のみであり、それ以外の多くが搬入土器であると推定された。これらの特徴は、この周辺地域の縄文中期曾利式期土器が各遺跡ごとに在地的土器がかなりの割合を占有するという状況とは明らかに異なる。

御社宮司遺跡・塩川遺跡・谷戸城跡とも内耳土器の器形がほぼ同一の地域内に属するとされている。これまでの分析結果からみると土器胎土組成は多様性をもっていることから産地が特定地域に限定されている可能性は低いと推定される。ただし遺跡ごとにある特定の組成が優勢であることから、産地ごとに供給量の多少が存在した可能性は考えられる。分析試料においても、時期や形態分類をより細分化することでさらに器形と産地の関係が明確化する可能性があるかもしれない。今後これらの地域における資料の蓄積によって生産地と消費地との関係が明らかになるものと期待される。

おわりに

谷戸城跡から出土した内耳土器を胎土分析した結果、複数の産地の存在が推定され、安山岩・デイサイトが分布する地域に産地が推定される土器が比較的集中する傾向が認められた。

註(1) 本報告での「在地的土器」は、考古学による型式学(形態学的)的手法に基づく在地土器と区別するため、岩石学的手法の胎土分析結果として推定される在地土器に対して用いる。この場合の在地の範囲は、土器が出土した遺跡を固定点として遺跡が属する地質単位の分布範囲を基準としている(河西, 1999)。

(2) ここではデイサイト・流紋岩を含む柱長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。

文献

- 服部敬史(1997a)「中世食器の地域性 3—關東・甲信」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 P77—118
服部敬史(1997b)「内耳土器の研究(上)」『土曜考古』第21号 P77—101
服部敬史(1998)「内耳土器の研究(下)」『土曜考古』第22号 P109—123
河西学(1989)「甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成—土器胎土分析のための基礎データ—」『山梨考古学論集Ⅱ』P505—523
河西学(1990)「大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析」『大和田第3遺跡』大和田村埋蔵文化財調査報告書第8集 P19—29
河西学(1992)「塩川遺跡出土土器の胎土分析」『塩川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第70集 P173—178
河西学(1997)「西田町遺跡出土土師質土器の胎土分析」『西田町遺跡調査報告書—宮町文化財調査報告書第23集 P72—75
河西学(1999)「土器産地推定における在地—岩石学的胎土分析から推定する土器の移動—」『東京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 P285—302
河西学・藤原功一・大村昭三(1989)「ハケ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『東京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集 P1—64
森原明廣(1993)「山梨県地域における内耳土器の系譜」『山梨県県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』9 P154—175
野村一寿(1990)「中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野館埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 P159—192

第6章 城内の植生調査

「花粉と植物珪酸体による谷戸城跡の古植生復元」

千葉大学園芸学部 百原 新・松下啓佑

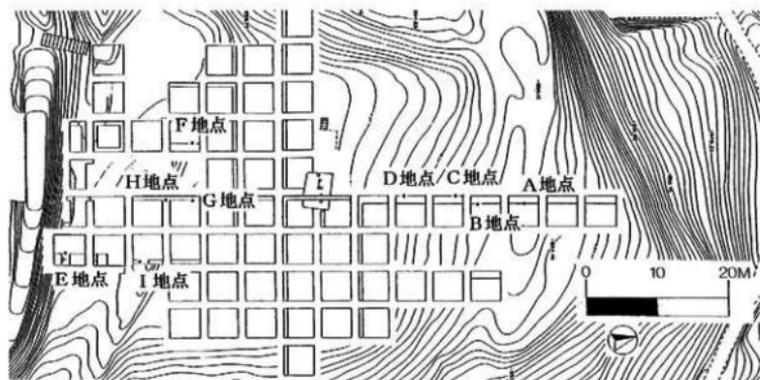
平成11・12年度発掘調査では、谷戸城北側の四の郭とその周辺で、花粉化石が含有されている可能性の高い有機質ローム層が検出された。そこで、谷戸城の植生史を復元するために、地層断面に露出した堆積物を採取し、花粉分析と植物珪酸体分析を行った。それと同時に、植生調査を行うとともに現在の表層花粉分析もを行い、表層花粉と現存植生との関係から過去の花粉化石群と古植生との関係を明らかにした。

分析試料と方法

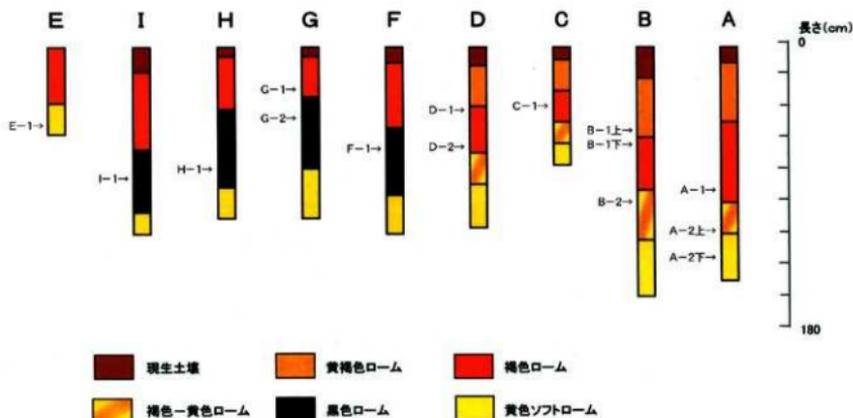
堆積物の花粉分析と植物珪酸体分析は、四の郭のA～Iまでの9地点（第6図）で、そこで検出された、地山の黄色ソフトロームを覆う黒色ないし褐色ローム層を中心に行った（第7図）。試料の採取は現地で柱状試料をブロック状に切り出し、それをサランラップで包んだ後にアルミホイルで固定して研究室に運んだ。研究室で採取した試料を花粉分析用と植物珪酸体分析用に分割した。花粉化石試料はアルカリ処理、非化石素処理、アセトリスス処理、染色を行ったのちプレパラートを作成したが、風化ガラス分を多く含むロームだったために、水洗と非化石素処理を通常よりも多く行った。植物珪酸体は試料を過酸化水素水処理、濃塩酸処理、超音波洗浄後、沈殿法を用いて抽出し、プレパラートを作成した。

分析結果と考察

堆積物中の花粉組成（第8図）は、同地点の層位的なちがいよりも地点間による違いが明瞭であり、四の郭外側の斜面に近いA～D地点とE地点では、ツガ属、スギ属、マツ属、カラマツ属といった針葉樹の花粉が多く、特にツガ属がA地点で非常に多く産出する。一方、平坦面上のF～I地点の試料では針葉樹ではイチイ・イヌガヤ・ヒノキ科花粉だけが多く、コナラ属、ニレ属、クリーシノキ属といった落葉広葉樹とイ



第6図 堆積物試料採集地点（帯郭及び四の郭）



第7図 試料採集地点柱状図

ネ科、キク科を含む草本花粉が多い傾向があった。この花粉組成の違いは、古植生の地域的な違いを反映していると考えられた。すなわち、谷戸城の斜面にはツガ属が優占する針葉樹林が分布し、四の郭の平坦面では、花粉化石群で全体的にイネ科、キク科、オオバコ属、ヒユ科などの明るい草地を構成する草本花粉が多いことや、ササ類やススキ起源の植物珪酸体が卓越する(第6表)ことから、クリが植栽されていたものの、木本層が発達しない開けた草地が存在したと考えられた。現存植生と表層花粉との関係からは、カバノキ属など現在の谷戸城に生育していない植物の花粉が、谷戸城に多く飛来していることが明らかになり、かつて草地だったと考えられるF~I地点で多産する木本花粉には遠方飛来花粉が多いことが考えられる。

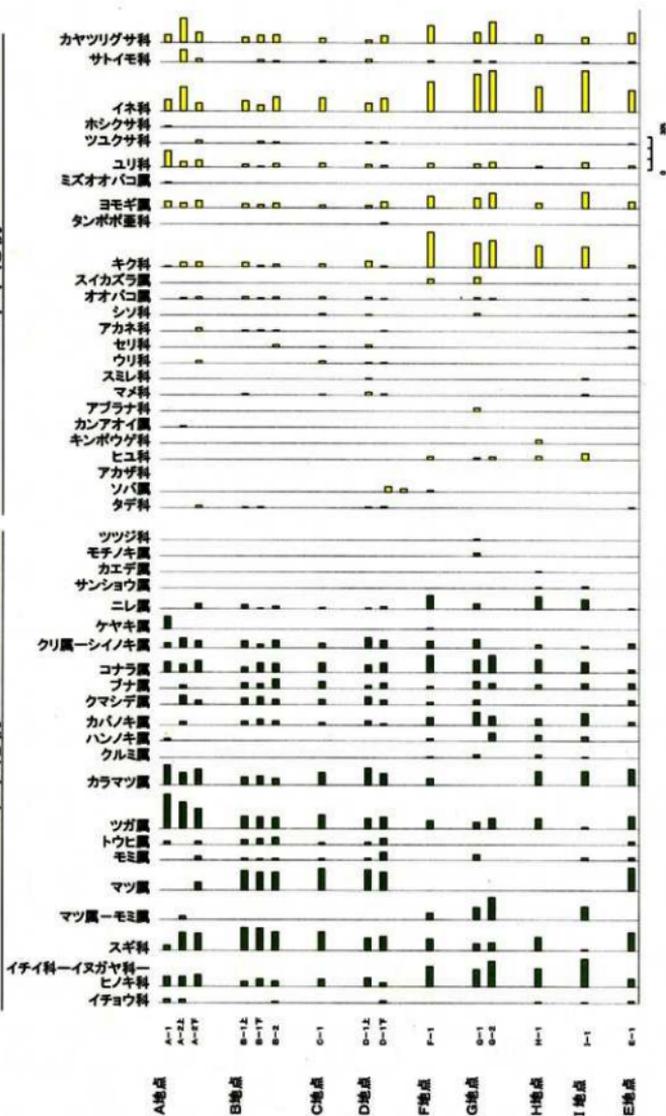
今回古植生復元を行った植物化石群の時代は、A~C地点で褐色ロームの上を覆う黄褐色ローム層が盛土で、山城として機能していた時代の城壁の跡である可能性が高いことから、中世以前と考えられる。しかし、地山を構成する黄色ソフトロームを覆う褐色ロームないし黒色ローム層から検出されるイチョウ花粉は、一時期中国から導入されたイチョウが植栽されていたことを物語っており、植物化石群の時代も中世のものである可能性が高い。

第6表 谷戸城跡で採取した古土壌中の植物珪酸体組成

	A地点			B地点			C地点	D地点		E地点
	A-2下	A-2上	A-1	B-2	B-1下	B-1上	C-1	D-2	D-1	E-1
小型珪酸体(C%)										
鈣型I	9	2	8	5	17	10	18	11	5	15
鈣型II	50	49	34	76	49	41	27	40	49	21
鈣型	15	24	28	12	20	19	25	17	19	32
ケ/ク*特型	5	13	10	2	2	12	12	9	20	17
その他	21	12	20	6	12	18	17	22	8	15
小型珪酸体個数計	171	178	251	127	170	177	193	202	153	212
大型珪酸体個数計	111	73	121	82	88	105	126	87	96	166
珪酸破片										1
小型珪酸体個数比(C%)	61	71	67	61	66	83	53	70	61	56

草本花粉

木本花粉



第8図 谷戸城跡の堆積物の花粉ダイアグラム

調査組織

調査主体 大泉村教育委員会

調査機関 大泉村教育委員会

事務局 教育長 藤原 昭（～平成12年9月30日）
三井正隆（平成12年10月1日～）

課長 新藤 恵

教育係長 浅川正人

調査担当者 主任 伊藤公明
渡邊泰彦

発掘作業員 浅川達子・浅川久代・浅川日出子・浅川房子・斎藤乙女子・藤原祖乃子・藤森里美・
藤森八千代・細田嗣代・三井明美

整理作業員 浅川洋子・細田嗣代・三井明美

報告書抄録

書名	史跡谷戸城跡（しせきやとじょうあと）	
副題	平成12年度 環境整備事業に伴う発掘調査概報	
巻次	Ⅲ	
シリーズ・番号	大泉村埋蔵文化財調査報告 第15集	
編著者名	渡邊泰彦・伊藤公明	
編集・発行機関	大泉村教育委員会	
連絡先	〒409-1502 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025 TEL0551-38-3115	
印刷所	ほおずき書籍株式会社	
発行日	平成13年3月31日	
しせきやとじょうあと 史跡谷戸城跡	ふりがな	やまなしけん きたこまぐん おおいずみむら やと あざじょうやま
	遺跡所在地	山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字城山
	市町村コード	19406
	地形図	1:50000 八ヶ岳・葎崎
	位置および標高	北緯35° 51' 15" 東経138° 23' 20" 頂上862m
	主な時代	縄文時代・中世
	主な遺構	土塁、空堀、土橋、土坑、ピット、堅穴状遺構
	主な遺物	かわらけ、内耳土器、茶臼、石臼、古銭、縄文土器、石器、黒曜石
	特殊遺構・遺物	青銅製飾り金具
調査期間	2000年7月3日～12月28日	

史跡 谷戸城跡Ⅲ

平成13年3月31日 発行

発行 大泉村教育委員会

〒409-1502 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025

TEL (0551) 38-3115

印刷 ほおずき書籍株式会社

〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5

TEL (026) 244-0235

